

横浜中華街で ホテル開業ラッシュ

グルメの街・横浜中華街でここ数年、若者や訪日外国人旅行者をメインターゲットにしたホテル、ホステルなどの開業ラッシュが起きている。すでに5軒がオープンし、2022年までに少なくともあと2軒が完成する予定。宿泊客の増加により、課題だったナイトタイムエコノミーが活発化して、観光消費額も増えるというのが街づくり関係者の皮算用だ。

横浜中華街のホテルとしては長い間、「ホリデイ・イン横浜」しかなかった。同ホテルは1981年、地元の老舗「重慶飯店」がホリデイ・インのフランチャイズ店として開業。2003年に契約を解消し、「ローズホテル横浜」と名称変更した。客室数は184室で、レストラン、宴会場、結婚式場などを備えたフルサービスのホテルとして定着している。

ローズホテルの独走を阻止したのが、マンスリーマンション・不動産賃貸仲介の「リブ・マックス」(東京都港区)。ビジネスホテル「リブマックス横浜元町駅前」を2017年3月、朝陽門(東門)近くの旅館跡地にオープンし、若者や出張サラリーマンらの宿泊需要を掘り起こした。客室数は154室で、コーヒーや軽食を出すカフェも併設している。

これと前後して、ドミトリー(2段ベッド)タイプの「チルルコーヒー&ホステル」(2016年12月、20床)、素泊まりタイプの「ヒロマスホステルin横浜中華街」(18年7月、65床)、寝台列車を模したカプセルホテル「HARE-TABIトラベラーズイン・ヨコハマ」(18年10月、30床)など特色のある小規模宿泊施設が開業した。

場所と規模で話題を呼んだのは、2018年7月、中華街のシンボル・関帝廟の真向かいに開業したカプセル&キャビンホテル「グローバルキャビン横浜中華街」。ビジネスホテルを全国展開する共立メンテナンス(東京都千代田区)が、閉店した大型中華料理店(地下1階、地上5階)を買い取り、内装をリノベーションして128室を設けた。

共立メンテナンスは、ここから至近距離にある関帝廟通り沿いの料理店跡などに約2,160平方メートルの用地を確保。2022年をめどに、地上9階、延べ床面積約9,300平方メートルのホテルを建設する計画を公表して



横浜関帝廟(左側)の真向かいに開業した「グローバルキャビン横浜中華街」(右側)

いる。ホテルブランドはビジネスホテルよりワンランク上の、観光需要にも対応できる「ドリーミアンプレミアム」を予定。

また、大和ハウス工業(大阪市)も、延平門(西門)近くの料理店跡地(約360平方メートル)にホテルを建設している。地下1階、地上9階、延べ床面積約2,500平方メートルで、客室数は118室。完成予定は2021年2月。同社の子会社が展開するビジネスホテル「ダイワロイネットホテル」が至近距離にあるので、役割分担も課題になりそうだ。

具体化はしていないが、横浜中華街のメインストリート・中華街大通り沿いでも、廃業した店舗の跡地などでホテル建設が検討されているという。このほか、不動産会社などが表通りから奥まったところにある華僑の住宅(空き家)を買い取ったり、借りたりして、ゲストハウスや民泊に転用する事例も出てきた。

このような動きを後押ししているのは、料理店、土産物店などを営む華僑の高齢化や後継者難だ。中華街の店舗はこれまで、食べ放題の店、点心のテイクアウトショップ、占いの館、タピオカ店などに姿を変え、生き残ってきた。新規参入のホテルやホステルには、東京五輪後に予想される景気後退を乗り越えて、街の牽引車になることが期待されている。